

## 基礎学力とは何だろうか？

平成 30 年 11 月 17 日

金沢大学教育担当理事・副学長

グローバル人材育成推進機構スーパーグローバルハイスクール特区教育センター長

柴田正良

本年、2018 年、本学附属高等学校は SGH 事業の最後の年を迎えました。この 5 年間、附属高校の生徒や先生たちは、これまでにないチャレンジと共に多くの経験を積みました。それらの経験は酸いも甘いも含めて、一つひとつが一人ひとりの心の中に深く刻まれたことでしょう。

このように、高校生たちはこれまでの殻を破ろうと果敢に自らの限界に挑戦し続け、同士たちとも言える、同じ志をもった高校生たちと連携を強めようとしています。例えば、今年 1 月には、泉丘高校、二水高校、本附属高校が集い、グローバル課題などをテーマとした 3 校合同の「課題研究発表会」を開催しました。また、高大接続ラウンドテーブルが本年 2 月と 9 月の 2 回に渡って金沢大学主催で行われ、高校での探究的学びを大学での研究に確実につなぐ方策を求めて、高校生と多様な聴き手との「遭遇」が実現されました。さらに、来年、2019 年 3 月には、北信越地区にある SGH 指定校、アソシエイト校が一堂に会して発表を行う北信越 SGH 合同発表会が計画されています。

それに対して、こういった先導的な高校生たちを受け入れる大学側の状況はどうでしょうか？ 金沢大学に限っていえば、本年 7 月に、ようやく「金沢大学高大接続コア・センター」を立ち上げ、記憶の蓄積と再生を主眼とした従来の「一発勝負のペーパーテスト」に代わる新しいタイプの入試の開発を急ピッチで進めています。それらは例えば、現在の計画では、本学が提供する入門セミナーやラウンドテーブルに参加してもらった結果を含めて総合的な評価を行う KUGS 特別入試や、「超然文学賞」及び「日本数学 A-lympiad」という本学主催のコンテストの審査結果を含めて総合的な評価を行う超然特別入試です。

しかし、こうした改革に対する大学教員の反応は、一般に、「基礎学力の担保はあるのか？」というネガティブなものです。要するに、特別入試によって入学した生徒は学力不足のせいで大学の授業についていけないのではないか、という懸念です。しかし、ここで問題視されている「基礎学力」とはそもそも何でしょうか？ それは結局、私たちが決別しようとしている旧来の学力観・入試観に根ざすある種の「幻想」ではありませんまいか。我が国では高校を卒業すれば、ふつう、大学入学資格が得られます。それは、卒業生が「基礎学力」を備えているということではないのでしょうか？ 私のささやかな教師経験からすれば、大学で求められるのは、それ以上の「基礎学力」というよりは

「基礎能力」、つまり、自分で足りない部分を補い、さらに高みを目指そうとする「自学自修」の志と努力です。

しかし、いずれにせよ、私たちみんなを呪縛している「変化への恐怖」は根深く、確実にそれを振り払わねばならないとしても、それにはもう少し時間がかかるのかもしれない。